

昔の部落（村）

久米島は霧島火山島で溶岩の島で、今の美崎校区は砂地で土地の隆起と川から絶えず泥が運ばれてきた沖積平野で海岸や沼地になり田んぼと出来てきました。津波とかの心配もあり高いところに住まい部落（そこからは石器時代の跡がいっぱいあり中学生の時は郷土研究クラブで発掘の作業したことがある仲村昌尚先生と）があり登武那覇の山周辺に、上宇根、上比嘉、宇江城岳の下に、堂（宇江城）、比屋定があり、美崎校区は上宇根からの始まりだとわかる、サンガータ（真謝から郵便局に抜ける道）の頂上部（登武那覇公園入口）に今でも1軒（屋号ンニ）が残ってます、そこが昔の位置で段々今の真謝に3軒、安谷屋たな原、真謝原から1軒ずつ、上宇根から1軒と移住し、そして現宇根に2軒と移住。真泊はそのずっと後に渡名喜、糸満の漁師の移住でできる。[最初移住真謝3軒](#)の屋号（安谷屋たな原アダンナ、真謝原ウスクチャ、上宇根ウフグミシ）といまでもあります。美崎校区は県道を堺に山側（溶岩本陸）と海岸側（沖積平野）に住宅が別れている県道海側の敷地は一段下がってあり、県道と同じ高さにあるのは埋め立てで嵩上げしている、その道後ろは一段下がっているの分かる。段々海側の通りはカニク（海岸側）と地区名がつく、最近は下水道工事で掘ってみると砂地で困難工事の感じがする。山側の地域ではみかんの木がたくさんあり実っていてたくさん食べてのを覚えているしかし海側にいくとそこでみかんを拝借したことはない、最近は海水が山側まで上昇しているのかみかんが全滅状態であんなに美味しかったみかんがなくなり勿体無いです。

久米島と奈良朝の交通

久米島が石器時代（高い丘地に住み家）から、今の美崎校区（沖積平野）へ一軒ずつ移住し米作の農耕が始まる頃に、奈良朝廷に貢物をあげている。元明天皇和銅7年（西暦714年）に「・・・南島奄美信覚球美等島人52至・・・」[続日本紀](#)。奄美は沖縄本島含む、信覚が八重山、球美が久米島にあたる。※現在「球美」を使い久米島の歴史を伝えようとする周知が生まれる大変いいことだと思います。

奈良の大仏が出来てから6年あと[奈良朝廷](#)が最も盛んな時は仏教が非常に盛んで[支那](#)と朝廷との交通も盛んに行われていた「[遣唐使](#)」ほとんどがお坊さん学生で、ひとつの船に多くて120人が乗り、航海も慣れてないため度々漂流し、その船は[久米島にも流れ着き](#)流れついた人たちから朝廷の都の色んな情報を聞きそこに行きたいことが芽生え、奈良へ貢物を持ち行くようになり、たいそう久米島の為になった事でしょう。それが[平安時代](#)になると地方の政治がみだれ瀬戸内海も海賊が横行するようになり段々交通も減り、その空いた期間が言葉風俗習慣をだいぶ遠くさせた。日本語と沖縄語は同じでしたが、現在でもいくらか似ているところもありますが長い間の交通の途絶えそして気候風土の違いが沢山の違いを生み出し独立国へ変わる。

久米島と沖縄の関係

日本と久米島は奈良朝時代に交通があったことは分かったが、近くの沖縄本島との交通のことは「[英祖王](#)」の時から書かれて、それは[源為朝](#)が沖縄に来て大里按司の娘と結婚し、その子が「[舜天王](#)」となる。鎌倉時代から沖縄の歴史も段々明らかになり、舜天の次に[義本](#)でその次が英祖王で、その時代に久米島の使者が貢物を英祖王に捧げ臣下なつたと云われ、久米島を支配し租税を取り立てたことはなく貿易関係であったことを「知ると、久米島の使者が頭の優れた人であったであろうことは誇りにも思う」。そのときの「[おもろさうし](#)」の歌に、久米の「こいしの」があちこちの港に出入りし「こいしの」が買ってきたこれこそが本当の京都の鉄と貿易の名人が久米島出身でその人が死んだ後「こいしの」が買ってきた同じものを買ってこれる後継人ができずに、内地（ヤマト）の貿易商の名人に頼むと云う船出の歌である。鍛冶屋のことも沢山歌われ、役人ではなく民間人同士で交通貿易があったことが分かる。後に英祖王の次、[玉城王](#)は酒色にふけ悪政だった為に、他按司がそれに反発し、南山、中山、北山にわかれ三山分立時代の戦国となる。日本は[北条高時](#)、[足利尊氏](#)等の戦乱時代。[久米島も影響を受け武力](#)をもった按司があちこちに城を構え人民を支配する「[按司時代](#)」となる。この混乱期のことを沢山「おもろさうし」に歌われそして今解かれ知ることが、「私が今まで小学校、中学校、高校では学べなかったことで感心衝撃を受け、久米島（沖縄）の人間として力となり、考え方そして自分を置く位置も変えてくれたことに気づかされる。」そして佐敷按司「[尚円志](#)」は武略に優れ、中山王につくと、支那と日本とも交通し力を蓄え（[その大きな役目人材が久米島であったであろう](#)）、北山も支配その後南山と支配し三山を統一することで、沖縄の政治・経済・文化を一挙に変えていく、その[影響も久米島](#)に及んでくる。

久米島も順調に歴史を刻んでいたら現在はどうだったかと思う、沖縄の歴史の空白、戦争でチョン切られたような感じがする、私が小学校、中学校で学ぶ歴史は鎌倉、奈良、徳川と教えられそれが久米島の歴史だと教えられ、中学校で郷土研究クラブでかじっていた時もあり凄いい教科書がすぐそこにあるのに、現実に教科書とは結び付かないことで学び知ろうと興味が湧かない、血が通ってないような、過去の事から学ぶことの大事さを寸断されたような、その空白を血が通うように再現紐解いて自分の根っこを探せばすごい栄養が通うようなことに気づかされます。すぐそこにある歴史から学ぶ扉を開き、久米島の祖先、私たちのおじい、おばあは自力で生き、すべての自然の営みを受け止め、離島でありながらひとつの国を形成していることに多くを学ぶ。是非久米島美崎校区の方は読んで頂きたいそれから始まる気がします。

観音堂（カンノドー）と菩薩堂（ブサードー）

尚真王が久米島を征伐することになるが、沖縄本島では首里に按司を集め掟き領地を治め100年後地頭代として置かれるが、久米島には按司掟を課せられた形跡はなく、首里政府に久米方代官が置かれ地頭代（喜久村家）までの100年のことは不明。

※堂の比屋の乱後、この人を中城（仲里⇒宇江）按司とし更に具志川仲里間切の総地頭に
して、名前は「中城親雲上」が治める。尚真王は極めて温和な政策ををとり久米島へ役人
を配して押さえつける事はなく寛大に取り計らっている。この中城親雲上とは、久米法印
と言う波の上寺の住職が隠居し故郷である久米島に観音様と帰り、真謝に観音堂を建て住
むようになった時の弟子で、その久米法印の死後、中城親雲上が宇江城跡の下現在の所に
移し信仰している。久米法印は遺老説伝によると、日本に渡り密教を学び、波の上護国寺
の住職なったとも記されていると云う。堂の元は真謝の菩薩堂（ブサードー）の敷地にあり、
中城親雲上が現在の宇江城に移したもので、ブサードー28の隣「寺の側」（ティランズ
バ29）、県道へだてた「寺の門」（ティランズバ93）の屋号が残る。ティランズバは中城の
直系の本家と云う。

※堂の比屋の乱

中城（宇江城）按司の家来として務めていて、首里王の久米島征伐で城が焼かれ火の海に
なりどうしようもなくなった按司が子供を堂の比屋にたくし自分は不明になる。堂の比屋
はしばらくこの子を育てていたが後にその子を殺し病死として、首里へ行き王に色々と解
きほぐし説明自分を中城王にして貰う。その時代位から按司時代（琉球王国の戦国）から
平和な琉球、武器を持たない国に移り変わる狭間で、琉球そして久米島島民の為にも改革
政治家「堂の比屋」は自身が、良い意味でのクーデターを考えていたのかもしれない。

琉球王国も三山統一（尚円志）し武器のない国（尚真）になるまではこうした陰謀があり、
本島では護佐丸、阿麻和利の乱がありせめぎあいは凄かったかも、でも平和への改革政治
の始まりですが、「ワカチャラ」の乱は久米島には痛手だったかもしれない、こうして琉球
王国は三山統一からより以上の中国ほか外国との交易を密にしハブ島としての機能を十二
分に発揮し知能高い商人も久米（首里那覇）で沢山（儀間真常、蔡温）生まれる、その時
代に薩摩（島津）藩の侵攻での日本戦国時代真最中の貢献は沢山あったであろう。

久米島史話（仲原善忠・義秀著）を読んで。